

『百三十里の所を拾ふの無心』について

—春合宿で話題になったこと一、二—

井筒 満

「世は大事也」に託されたもの

『百三十里の所を拾ふの無心』（西鶴）やその他の『万の文反古』の諸作品については、いままでにも何回か例会でとりあげ検討してきている。そうした成果をふまえて、今回の合宿（一九八九・三）ではさらに一步ふみこんだ検討がなされた。ここでは、その内容を紹介したい。ただし、私の力不足と紙幅の関係からここではその一部を紹介するにすぎない。また、これらの諸論点は、現在進行中である夏の全国集会へむけての研究活動の中で、さらに深められつつあることもあらかじめ断っておきたい。

今度の検討の中で、まず大きくとりあげられた問題は、『万の文反古』の「序」と、本文（各人物の手紙の文章）の後につけられた「後注」との関係である。

まず、「序」の一部を引用しておこう。（引用は『校注 古典叢書 万の文反古』・東 明雅校注 明治書院から）

すきし年の暮に、春待宿のす、払ひに、鼠の引込し書捨なるを、小笹の葉すゑにかけてはき集め、是もすたらす求める人有。それは高津の里のほとりに、わすかの隠家、けふをなりわひにかるひ取置、今時花張貫の形女を紙細工せられしに、塵塚のごとくなる中に女筆も有、または芝居子の書るも有、おかしき噂、かなしき沙汰、あるひは嬉しきはじめ、栄花終り、ながくと読つづけ行に、大江の橋のむかし、人の心も見えわたりて是。

ところで、この「序」の意味について私たちはいままでほぼ次のような整理をしてきた。（『文学と教育』一一八号「第三〇回全国集会の記録」より）

「高津の里」といういわば場末のふきだまりみたいな

ところでその日暮しの生活を送っている人物が登場する。：「わすかの隠家」という表現からも感じられることだが、この男は根っからの下層町人としてではなく「中層町人から下層町人へ転落した人物」（熊谷孝氏）として設定されている。こうした転落は、「銀が銀を儲くる時節」を生きなければならなかった、「常の町人二代目」の人々にとってけっして例外的なものではなかった。この男は、そうした普遍につながる個としてここに登場しているわけだが、さらに注目すべきことは以下に並べられた文反古が、この人物の目をおして選択されたものであるという点である。一つ一つの手紙についている後注もだからこの人物が書き加えたものだという事になるのだ。

これらの指摘は今回の検討においてもその前提となっていたが、次の点がさらに明らかにされた。

まずこの男についてだが、明日のない状況を生きる「常の町人二代目」として、西鶴がこの男を設定しているという点が明確にされた。また、そのことを通して、西鶴の視点的立場がそのような状況を生きる「常の町人二代目」のものであることも明確になった。

西鶴が、「常の町人（新興町人中層者）二代目の視点」を確立したのは、『世間胸算用』や『万の文反古』などの

書かれた一六九〇年代であり、また、その場合の中層者とは、厳密に言えば、「上層町人への可能性を持った中層であるよりは、下層者への転落の不安にたえずおびやかされている、西鶴と同世代の二代目新興町人中層者」であることはすでに確認されていた。が、「明日のない」という規定をくぐってつかみなおすことで、西鶴文学にとって一六九〇年代が画期であることの意味がより鮮明になったのである。

これは当然、作品形象のとらえ直しにもつながっていく。さきほどの引用の中に「一つ一つの手紙についている後注もだからこの人物が書き加えたものだということになるのだ」という指摘があった。だが、明日のない状況を生きる「常の町人二代目」であるというおさえが明確でなかったため、後注の文章に託されたこの人物の思いや、それを虚構した西鶴の発想を十分につかむことができなかった面が私たちにあった。では、その把握がどう深化したのか。『百二十里の所を拾ふの無心』の後注を引用して具体的に紹介しよう。

此文の子細を考見るに、此男手前をしそこない、兄にも談合なしに江戸へくだるとしれたり。何国にても今の世金がかねをもうける時になりぬ。朝夕其覚悟して、それ／＼の家業精に入べし。ない所には忝奴ないのは銀な

り。日本国の金銀あつまり、瓦石のごとく見えし江戸より、わずか拾ふあまりに手づまり長く／＼と無心申越も、いまだ兄弟のよしみなればなり。他人のかたへ銭沓文の事にもいひ難し。世は大事也。

大阪で世帯をもちくずして江戸へくだった男（源右衛門）が結局生活にいきずまり、今となつては深く反省して、いますからどうか大阪に帰ることを許してください、そのための旅費として「十二匁」を送って下さいと、自分の大阪の兄（団扇屋源五左衛門）に無心しているというのがこの手紙の概要だ。兄も零落している。だがそんなことはかまっていられない。恥も外聞もない。わずかな金を兄からもぎとるために、源右衛門は必死になっている。そこには明日のない生活のなかで追い詰められ疎外された人間のこずるさがにじみでている。

右の文章は、そうした手紙に対する感想として書かれている。ここで忘れてはならないのは——私たちはついつい忘れがちだったのだが——その感想を書いている人間自身もまた明日のない状況の中を生きている人間だということである。そういう場面規定を忘れると、たとえば、「朝夕其覚悟をして、それ／＼の家業に精に入るべし。」などという言葉は、悟りすました人間の語る教訓のようにも聞こえてくる。成功者が後輩たちに言っべきかす教訓というよ

うな印象も生まれる。だが、上記のような場面規定において読めば、これらの言葉からは全く違った人間の声が聞こえてくるだろう。

ここにあるのはむしろ、金が金をもつける現実の中で苦しみながら、自分の人間を見うしなわないたためにその現実を凝視している、そのような人間の声である。そういう位置づけにおいて読むなら、結びの「世は大事也」という言葉も、「世わたりは大事である」というような教訓的な言葉ではなく、自分たちの人生のもつ重い意味を確認している言葉としてひびいてくる。

この点についてさらに合宿では、次の点をはっきりおさえておく必要が強調された。西鶴にとって「世」とはむしろ自分たちの実人生としての「浮世」のことである。と同時に『西鶴諸国咄』の序文にみえる次のような意味をこの言葉は含んでいる。

「人はばけもの、世にないものはなし」

西鶴は、この序文で「世界は広い」ということをいっています。彼のいう「世間」というのは、自分のデイリーな直接体験の世界以外の世界、生活圏のことです。それは、自分の意向によつては経験可能な世界ですし、自分の意識にのぼってこなくとも、自分の生活はこの世間の影響を絶えず受けている。それが世間というものです。

が、それは、ともかく自分にとって経験外の世界です。「世間が広い」ということは、だからして、人間にとって未知なことがいかに多い、この世界に関して既知のこととはほんの一部分にすぎない、ということはいいあらわしています。

右の引用は『芸術とことば』（熊谷孝氏）からだ、この指摘をふまえて読み直すなら、「世は大事也」という言葉のもつ含蓄もさらに明確になってくる。これは、「世間が広い」ことを自覚した人間の言葉なのである。

リアリズムの二つの側面

さつき、手紙の書き手である源右衛門について「明日のない」人間という意味のことを書いた。この場合の「明日のない」とは、経済的に明日がないというだけではなく、精神的にも明日がないという意味である。この点が、西鶴世代とは全く違う。後注の書き手（西鶴世代の一人であろう）とも違う。こういう人物を描いている意味が、リアリズムの二つの側面という問題との関連の中で今回あきらかにされた。話題をこの問題にうつそう。

西鶴はその作品の中で、「あるべき人間の姿」を描くとともに、「ありふれた人間の姿」を描いている。前者について言えば、『忍び扇の長歌』（『西鶴諸国咄』）の姫や

『人には棒振虫同然に思はれ』（『西鶴置土産』）の利左衛門などがそれだし、後者について言えば、本号で紹介されている『長刀はむかしの鞘』（『世間胸算用』）の人々やこの作品の源右衛門などがそれである。

これを『芸術のことば』（前掲）の言葉で整理すれば、「西鶴の描いた人間像は、典型像は、不可能を可能に変えていくデモニッシュな人間のそれであるか、ある時点において、そうした可能性を見失ってしまった人間の姿であるか、そのいずれかであります。」ということになるだろう。

人間の可能性をリアリスティックに追求するのが真のリアリズム精神である。そして、可能性の追求は、可能性を失った人間の凝視と結びついている。そのような凝視にさせられてこそ「あるべき人間」の追求もリアリスティックなものになるのだろう。

「可能性を失った人間」——その精神において明日を失ってしまった人間を凝視する意味についてはさらに次のような重要な指摘がなされた。

明日を失った人間の姿は絶望的である。しかし、西鶴は、その絶望的な現実を自分たちが絶望におちいらないために凝視している。絶望におちいらないために、笑いの中で徹底的につきはなして描いている。『百二十里の所を拾ふの

無心』の表現全体をつらぬくものはその精神である。

この「笑いの中で徹底的につきはなす」という西鶴の喜劇精神の意義について、近世小説の特性——近世リアリズムの特性という角度から新たな照明が当てられた。それは次のようなことである。

西鶴の喜劇精神という場合、それをつちかつたものは俳諧である。俳諧性・連句性ということにぬきはその喜劇精神をつかむことはできない。また、この点をぬきにしては、説話文学から近世小説へという展開——近世小説を実現した西鶴（世代）の文学的イデオロギーの特性をつかむことはできないのである。

言い換えれば、西鶴は、俳諧性を媒介にして（俳諧性に媒介されつつ、それを越えて）近世小説という新しいジャンルを創造したのである。

この点については、すでに『芸術とことば』において次のように指摘されていた。

この作者の「ことば」の選び方は、ほんとうにすばらしい。ムダがないですね。一つ一つの「ことば」が光っている。詩の世界で長いこと「ことば」に苦勞してきただけのことはあります。談林俳諧、大阪談林のあつきはなした笑い。感情異化の詩の世界に身をゆだねてきた西鶴なればこそ、といった感じですよ。

：西鶴は：ほんの短い語句、短いセンテンスによる表現で相手の確に笑いへさそったり、いきどおりを燃え上がらせたり、ということをやっているわけです。

今回は、こうした指摘がリアリズムの二つの側面の追求をとおしてさらに深められたということになるだろう。また同時に、近代小説と近世小説との連続性と非連続性との関係を統一的にとらえていくうえでの重要な示唆を私たちはえたわけである。

紙幅がないので最後にこの作品の表現をつらぬく俳諧性ということについて、合宿の中でとりあげられた話題の一つを紹介しておこう。それは『百三十里の所を拾ひの無心』というこの題名の意味である。この題名自体が俳諧性にあふれているわけだ。この題名を讀んだだけで読者は、この作品の中心的内容についてある予想をもつことができる。百三十里（江戸から大阪までの距離）のあなたにいだかれにわずか拾ひの無心をする人物——金に困りきつた人物の表情がある滑稽感とともに浮かびあがってくる。本文の手紙との関係においてよりはっきりするのだが、短い言葉で笑いととも本質をつく俳諧的表現の特徴がここにもはっきりと現われている。それでは本文において、この俳諧性はどのようにふまえられまた越えられているのか。その点の具体的検討は全国集会でなされるはずである。